

『福祉』ということば

——仏教福祉からのアプローチ——

三 友 量 順※

The philosophical analysis of the term 'welfare'

Ryojun MITOMO

Faculty of Social welfare, Risshō University, Japan.

For the results of researches on Social Welfare to be made the most of in the welfare society, interdisciplinary approaches to study from the Art and the Natural Sciences and cooperation from such sides will certainly become necessary. Even in the domains of present author's academic specialization, i. e., Indian Philosophy and Buddhist Studies, much importance has been placed on the idea of welfare. The concept of Buddhist Welfare, in which the idea of welfare has been academically systematized according to Buddhist thoughts, we believe, can contribute to the upliftment of the universal spirit of welfare, which in turn provides the foundation to the practical aspects of the Buddhist faith.

Some have pointed out that we cannot grasp the exact nature of the word 'welfare'. It all depends upon how we define the word 'welfare'. What is 'welfare'? How far can we consider certain phenomena as 'welfare'? If we can systematically or administratively define the word as reality, we don't come across such a problem. In this sense, the concept of welfare is an important problem in philosophy.

Well before the idea of 'welfare' was given the nature as a system in modern society, the idea had had close connection with religion. In a way, the idea of 'welfare' had been the deeds based on the human quality to be able to be compassionate with others.

When we discuss the idea of 'welfare', we have to examine the historical development of the concept of 'welfare'. And when we discuss the historical aspects, we cannot ignore the welfare activities based on religious ideology. In recent years, in the prevalent materialistic value-system and world view, people tend to view lightly the problems of our 'mind' and 'spirituality'. Having such ideas in the background, in this paper, we would like to examine the nature of the concept of 'welfare'. By grasping the conceptual significance of a certain term, we can clarify the ideological and philosophical background that produced such conceptual significance.

keywords : Buddhist welfare, the term 'welfare', hita (Skt)

Human Well-being No1 (1997)

※立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：仏教福祉・福祉ということば・ヒタ (hita)・福祉の同義語・福祉と真実

はじめに

社会福祉にたいする学問的成果が、今後の福祉型社会に積極的に活かされるためには、社会科学のみならず人文・自然科学からも総合的・学際的なアプローチと協力が必要となる。本稿の筆者の専門領域は、インド学・仏教学〔仏教文化〕であるが、こうした視点に立って、この小論では、「福祉」ということばを検めて考察してみたい。概念としてのことばを、正しく把握することは、そこに由来する思想背景が明らかとなるからである。

福祉は、近代社会における制度としての位置づけがなされる以前から、その思想が宗教と深く結びついていた。相互扶助にせよ慈善にせよ、福祉はいわば「他者をおもいやる」ことが出来る人間性にもとづく行為であった。西洋社会における自然科学の発達が、それまでの宗教的な教義による固定的な世界観からの脱却に基づくものであったとしても、いつの時代にも人間性の回復は、宗教と密接な関係を有してきた。

インド学・仏教学においても、福祉の思想は重要な意味を有している。仏教福祉は、仏教思想にもとづいて、福祉を学問的に大系化することにより、実践面のうらづけとなる、普遍的な福祉の精神の高揚に貢献できえるものである。筆者は、「福祉」の精神と宗教とを深く関連づけている。この場合の「宗教」は特定の教義や信仰を意味するものではない。根本のことわりとしての「宗教」であり、ひととしてのあるべき姿を気づかせるという意味の宗教である⁽¹⁾。

上代以来、わが国にも福祉思想は存在した。特に仏教や儒教の受容は、わが国の福祉事業に多大な影響をあたえてきた⁽²⁾。また明治期からのキリスト教も、わが国近代の福祉事業をリードしてきた⁽³⁾。そこには他者にたいする慈悲〔愛〕という共通の精神があった。その他者が、隣人であったり同胞あるいは国民であっても常に、他者を思いやる精神が基本となっていた。

福祉は、その実体がはっきりしないという指摘もある。それは福祉という概念規定にもかかわってくる。何が福祉で、どこまでが福祉なのか。もし制度や行政論において福祉が具体的に実体として把握できるものであれば、そうした疑問は生じないであろう。その意味では福祉は哲学における重要な課題でもある。福祉を学問的に論ずる時には福祉史を論じなければならない。福祉史を論ずる時には宗教福祉を除外することはできない。

筆者は、従前の価値観が見直されつつある今日、イデオロギー的立場を越えて、福祉の精神を、あらためて問い直す必要があるのと考えてるのである⁽⁴⁾。精神なき福祉は、人間としての尊厳までも損なってしまう恐れがあるからである。但し、ここで論ずるものは、決して「仏教」を最上とみなす立場からのものではない。福祉と宗教とを見直す、その一助として、インド学・仏教学からのアプローチを試みることを、初めにことわっておきたい。

I 福祉ということば

〔1〕 欧米の言語における福祉

福祉ということばが、わが国における法律上の用語となったのは、第二次世界大戦後のことである。当時の『GHQ覚え書』〔昭和20年12月14日〕は、日本政府に対して、包括的救済政策の樹立を求めた。これを受けて、政府は「救済福祉計画」の実施体制を決定〔昭和21年4月〕するのである。この意味から、わが国の近代的社会福祉（社会福祉事業）の登場は、占領政策の貢献であるとみなす声もある⁽⁵⁾。

「福祉」の語は中国古典に登場するが⁽⁶⁾、戦後わが国で法律上の用語として用いられる以前は、「福利」ということばが一般的に用いられていた。漢字文化圏の、いわゆる東アジアの文化に影響を与えた仏教語は多い。「福祉」ということばは、筆者の調べた限りでは仏典には登場しないが、「福利」と訳された原語はインド学・仏教学においても重要なことばの一つである。それがどのように用いられ、その意味するものは何かということは後述することにして、はじめに、欧米の原語における一般的な福祉ということばを見てみたい。

社会福祉は英語の Social welfare もしくは Social wellbeing に相当する。英語としては古い言い方であるが、How are you faring? (いかがお過ごしですか) という表現がある。ウェブスターの辞典には fare は動詞では to visit, journey, get along などの意味があることを載せている⁽⁷⁾。to get along は「暮らす・過ごす」という意味である。そこで wel (=well) fare は、健康や生活を含めた「よい暮らし」と訳すことができる。wellbeing は、being が be (ある, 存在する) の動名詞の形であるから well-being は「よい状態であること」の意となり、welfare と同じように「幸福・福祉」などを表す語とされている。

これは他のヨーロッパの諸言語でもほぼ同様である。フランス語では福祉は bien-être となる。これは英語の well-being に相当する。公共福祉を bien-être public という。仏英辞典では bien-être を英語の well-being, comfort, ease, welfare 等に当てている。但し、公共事業などという時には政府や公共機関が援助するという意味を含む assistance publique となる。

スウェーデン語では välfärd が一般に福祉と訳される。väl は英語の well に相当する。färd は本来「旅行・遠征」の意で、ドイツ語の Fahrt (drive, journey, tour) と同様のことばで、英語の fare に相当する。

ドイツ語でも福祉を表す語が幾つかある。一般的には Wohlfahrt が英語の welfare に相当する。Fahrt は前述のように「旅行」などの意味がある。その他 wohl のみでも英語の welfare, wellbeing, prosperity などの意がある。他にも社会福祉と訳される Sozial fürsorge や社会福祉事業 Fürsorge arbeit (=social work) 等の Fürsorge は英語の care, solicitude に相当する。

かつての『東ドイツ（ドイツ民主共和国）憲法』第4条では 'Alle Macht dient dem Wohle des Volkes' 「すべての権力は、人民の福祉に奉仕する。」と明記されていた。東西両ドイツは統合されたが『西ドイツ（ドイツ連邦共和国）基本法』には、「基本権」として、「人間の尊厳（Würde）の不可侵（unantastbar）と、その尊重（achten）と保護（schützen）が、すべての国家権力の義務（Verpflichtung）である」とし、「世界におけるあらゆる人間の共同社会（G-

emeinschaft) と平和、及び正義 (Gerechtigkeit) の基礎として、不可侵にして、譲渡しえない人権を認める」〔第1章第1条〕と定めている⁽⁸⁾。

興味深いことに、かつての東ドイツ『憲法』で謳われていた「人民の福祉」は、西ドイツ『基本法』では「福祉 (Wohl)」ということばを特別用いず、代わりに、『基本法』前文 (Präambel) には「ドイツ国民は、神と人間に対する責任を自覚し、……世界平和に奉仕 (dienen) しようとする意志」に鼓舞されるべきであることを述べている。神と人間に対する責任であるとする捉えかたの中に広義の福祉も含まれる。ここに、欧米の自由主義国における宗教と福祉との関連が顕著に示されていると言えるであろう。

〔2〕 東洋の言語における福祉

アジアでは、福祉に相当することばにどのようなものがあるのでしょうか。現代語として用いられている言語は、国によってもまた民族によっても異なるが、反面、同一のことばが同じ概念を表すことがある。そこに共通する思想背景が認められるのである。

この小論の作成資料として幾つかのアジア諸国の大使館に問い合わせたところ、ブータン王国大使館からは早速回答を得た⁽⁹⁾。それによると、福祉を意味するゾンガ語に phen-de という語があるという。phen-de はかれらの使用するチベット文字のローマ字表記では phan-bde となるが意味は同じで、「幸福 (happiness)・幸運 (blessing)」の意がある。チベット語では動詞形の phan-pa は「役立つ」という意味をもつ。ブータンの政府高官からの回答には「phen-Benefit others, de-through; making happiness through benefiting others」と記されており、かれらの用いる福祉を表す語が「他者に利益を与えて幸せにする」という意味に理解されていることが判る。

チベット語の phan-bde はサンスクリット語の hita に相当する。hita は「ためになること・利益」の意で、仏典では「利行・哀念」とも訳される。hita はブータンからの回答と全く同じ意味を有する。hita は今日のヒンディー語でもその語が welfare の意味で用いられている。ちなみに、ヒンディー語で社会福祉は Jana-sevaye (ひとへの奉仕) となり、サンスクリットの語彙を多く残している現在ベンガル語では Samajer hitarthe (社会の幸福のため〔の行為〕) という。

中国の古典に登場した福祉の語は、または祉福ともいわれる。福祉という漢字は、その解字をみると「福」の偏の「示」は祭壇を表し、旁の「畐」はとっくりに酒を豊かに満たしたさまを表しているという。そこで「福」は、「神の恵みが豊かなこと」の意から「幸せ」という意味となる。「祉」も同様に、偏は「示」で、「神がそこに足を止めて福を与えること」の意から「福」と同様の意味をもつ⁽¹⁰⁾。福祉の「福」も「祉」も、本来宗教的な意味を有している。

漢訳仏典に「福利」と訳されたサンスクリット語の原語が puṇya である。puṇya はしばしば「功德・福德」と訳されるが、もとの意味は「徳 (virtue)・善行 (good work)」を表す。この語は称賛に値する (meritorious) 行為、即ち「道徳的 (moral) 或いは宗教的功績 (religious

merit)」を意味する。わが国の聖徳太子の福祉事業における二福田〔敬田・悲田〕の「福田」は puṇya-kṣetre (功德を生ずる田畑) の訳である。

業 (karma=行為) と業による応報の思想がインドの宗教の特徴とされるものであるが、古来、インドでは善行によって福利 (puṇya) が得られ、善 (kuśala) は徳に結びつくと考えられていた。この善 kuśala は「有益で、正しく、健全 (健康) な」ものとみなされた。そこでサンスクリット語では、善 kuśala と異なる (itara) もの (kuśaletara) というのが「病氣」や「不幸」の意味となる。

もともと中国的な思惟には、インド的な業と応報という観念は明確ではない。しかし、応報にも通じる思想がある。「積善の家には余慶あり、不善を積む家には余殃あり」〔『易経』〕というように、善は思いがけぬよろこびをもたらし、わざわざは善を行わないことによると考えられていた。仏教が中国に伝わった際に、hita (他者のためになること) や puṇya (善行) という語が宗教的な意味をもつことばとして把握されていたことが、その訳語から理解されるのである。

福祉 (福利) の語は、今日の東アジアのいわゆる漢字文化圏の国々では一般に用いられている。中国の古典、或いは仏教語に由来するこの語が、近代社会の制度や保障としての意味を有して用いられるようになったのは、わが国における欧米の言語からの翻訳語に関連がある。明治以降、西洋の文化や技術が導入された際に、わが国の知識人たちは、あるときには religion にたいする「宗教」の如く、それまでの仏教語を西洋の言語の翻訳語としてあて、或いは philosophy にたいする「哲学」の如く新たな造語によって対応をした。そうした翻訳語が、今日の漢字の文化圏に共通理解されているのである。その意味では、Social welfare (Social wellbeing) を「社会福祉」と訳したことの意義を大いに評価すべきであろう。

〔3〕 「福祉」の意味を有するサンスクリット語 hita

福祉 (福利) の語が、漢字の解字的には宗教と密接な関係をもっていた。福祉を「神から与えられた恩恵=幸福」として宗教的に捉える考え方は、仏教語としての「福利」の原語 puṇya や hita の語にも共通する。hita は動詞 dhā の過去分詞形で、ルートには「与える・授ける」の意がある。そこで hita は「与えられた」という意味から「ためになること」という意味となる。passive の意味が、積極的な active の意味に用いられ、hita-kāma (ためになることを欲する) というコンパウンドは「(他者) の福祉を欲する・慈善心のある」ということばとなる。また hita-vacana は「有益な助言」を意味する。hita は単なる「利益」ではなく、常に他者を益するという関係の上から理解されているのである。

この hita の語は、仏典ではしばしば為格 (Dative) の形の hitāya として表現されている。それを現代語訳すれば「福祉の為に」ということになる。但し、仏典に登場する hitāya の対象は「ひと」に限定されない。すなわちすべての「生きとし生けるもの (prāṇin) の」ということである。「すべての生きとし生けるものの福祉の為に」という思想が、仏教を貫いている。あら

ゆる生類にたいする哀念のころは「動物愛護」にも及ぶ。一切の生類を憐れむという、この精神はインドではマウリヤ王朝のアショーカ王〔在位・前268—232〕の政治理念のなかにも表明された¹¹⁾。

hita の語は、パーリ文の仏伝『マハーヴァッガ』に、ゴータマ・ブッタ（＝釈迦）が、出家修行僧（比丘）たちに伝道をすすめる有名なことばとして次のように登場する。

caratha bhikkhave cārikam bahujaṇa-hitāya bahujaṇa-sukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya devamanusānaṃ/ [Mahāvagga, 1-11-1] ¹²⁾

「比丘たちよ、遊行しなさい。多くの生類 (jaṇa) の福祉のために (hitāya), 多くの生類の安楽のために、世間を慈しみ、神々 (deva) や人間 (manusa) などの利益 (attha=artha), 福祉 (hita), 安楽 (sukha) のために。」

ここで、「生類」と訳した原語 jaṇa は、普通 man, person と訳されるが、語根 (jan) は「生まれる」の意で、それから派生した男性名詞の jaṇa は英語の living being が本来の意味である。このブッダの伝道宣言に登場する「多くの生類」にたいする artha (利益)・hita (福祉)・sukha (安楽) の為に立ち上がることが、その後の大乘仏教においてはボサツ (菩薩 bodhisattva) の実践規範としてみなされている¹³⁾。

hita は既述したので、次に artha (利益) と sukha (安楽) の語についても述べておきたい。インド人は、古来から人生の目標の一つとして artha (利得・富) を求めた。西紀後の初期大乘仏教の時代にも、すでに利子をとって貸す仕事 (prayoga プラヨーガ) が行われていた。そこで artha (富・財) のためのプラヨーガ (artha-prayoga) は高利貸を意味した。この artha は「目的」も意味する。その目的は、自己の利得に止まらない。そこで arthāya という Dative (為格) になると「～の為に」という意味となる。artha-caryā は「目的のための行為」という意味であるが、それは自身の利得ではなく「他者の為に尽くすこと」の意となる。それは、インド的思惟にもとづいて、他者のために有益な行為は、自らがその応報としての果を享受することになると考えられていたためであろう。漢訳仏典には、この artha はしばしば「義」と訳され、artha-caryā は「利行・利他」と訳されている。sukha は形容詞では「快い・楽しい」という意味であるが、中性名詞では「安楽・幸福」等の意味となる。インド・アーリーリヤ人の最古の聖典 Rg-veda では、この語は「(車が) 爽快に走る」という意味で用いられた。楽 sukha は苦 duḥkha にたいするものとされる。sukha は「安らかさ」も意味する。眠り svāpa を意味する語を付して sukha-svāpa となると「安眠」の意味となる。信仰の核心を得て「こころ安らかに生きること (sukha-vihāra)」¹⁴⁾が、大乘仏教でもボサツの理想の生き方とされた。

sukha は苦にたいする語であるが、仏教では、われわれが感受するものは快感であれ〔楽受〕不快感〔苦受〕であれ、そのいずれでもないもの〔不苦不楽受〕であれすべて苦であるとみる。それは感受するものはすべて永続性がなく刹那滅であるからである。永遠に変わることのない安楽 sukha は人々の理想であった。その理想である安楽が満ちた世界が、大乘仏教に登

場する Sukhāvati である。Sukhāvati は漢訳仏典では「極楽・安養国」等と訳された。浄土經典の説く、この理想世界は、阿彌陀仏への信仰によって誘われる遥か西方の彼方にあると信じられた。台湾の烏來には「老人安養院」と名付けられた老人福祉施設がある。この安養院の安養も、中国仏教に大きな影響を与えた浄土信仰に由来した名である。

Ⅱ 宗教と福祉

〔1〕福祉の同義語

日本国憲法第二十五条②には「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に務めなければならない。」と定められている。「よい暮らしむき」としての福祉はいずれの国民も求めている。世界の憲法の多くが、国民の福祉と繁栄 (the prosperity and welfare of a nation) を目指している。しかし、ここで問題としているのは、制度・行政、或いは社会保障としての福祉ではなく、福祉の精神である。

前節で見たように、欧米の言語における福祉は、東洋的な「福祉」の意味を十分に表現するものではない。仏教の根本精神「慈悲」に対応して、西洋では宗教的な意味をふくむ福祉に相当する語として *cherity* (慈善) が挙げられよう。cherity は優しく同情的な行為 (Kindly sympathetic deeds) の基にある、宗教的・道徳的な響きをともしう soul (魂・精神) と深く関係しているという。本質的にそれは社会的で無私 (social and unselfish) の行為とされる⁹⁵。

社会事業成立の前史としての慈善事業は、主として宗教的な慈善にもとづいて行われた。その活動の動機は、キリスト教では隣人愛であり、仏教では、菩薩の慈悲行であった。聖徳太子の人道主義的活動は、わが国における社会救済事業の最初の試みとして名高い⁹⁶。そうした行為を、上から下への行為、恩恵に浴せしめるという意志行為であるとする受け取り方もある。しかし、近代の社会的基盤を鮮明にした組織活動としての合理的な福祉を考える上でも、その前史の中で果たした宗教的精神を見失ってはならない。

仏教の「慈悲」は、もともと「慈」 *maitrī* と「非」 *karuṇā* とは別の語である。「慈」は「好意・友情」を、「悲」は「同情・哀憐」を意味する。伝統的に仏教では、「慈」は「与楽」に、「悲」は「拔苦」にあてられる⁹⁷。インド一般には、慈悲を表現するサンスクリット語には *anukampā* (f) という語がある。それは「(他者の苦しみを見て身体が) 震える」という意味である。仏教の慈悲は、愛憎の対立を超えた「純粹の愛」であり、仏典にはしばしば、慈悲は子にたいする親の愛情に譬えられている。大乘經典にはすべての衆生は「悉く、是れわが子なり〔悉是吾子〕」〔『法華経』方便品〕といい、かれ等にたいしては「愛するに偏党なし〔愛無偏党〕」〔同・譬喩品〕と述べている。

仏教語ではクサイと発音されるが、「救済」と漢訳されたサンスクリット語は *uttāraṇa* である。もとの語根は「(苦しみから) 救う・渡す」という意味がある。「奉仕 (service)」や「救済 (relief)」も福祉と関係する。もともと奉仕 service は「(ひとに) 使えること」の意である

が、civil servant や public servant（公務員）というときの servant（奉仕者）も同じ語源である。cherity 同様に、奉仕も本質的には社会的で無私の行為である。救済 relief は「（不安や苦痛の）除去」が本来の意である。奉仕や救済が、単に宗教家や富者の自己満足ではなく、そうした行為主体がつねに深い内省をもちつつ実践していかなければならないことは、『イミタチオネ・クリスティ』や『ボーディチャルヤーアヴァターラ（さとりの道）』などの東西の宗教書に共通して述べられるところでもある⁹⁸。

キリスト教思想家トマス・ア・ケンピス（Thomas A Kempis, 1380?—1471）は、謙遜と忍耐とをもってキリストの行為に倣うべく、愛の行為を実践すべきことを勧めた。彼は、こう述べている。

Multum facit, qui multum diligit. Multum facit, qui rim bene facit. Bene facit, qui communitati magis quam suae voluntati servit. [Imitatione Christi., I. 15-2]

「崇高な〔愛の〕実践は崇高な仕事を為したことになる。よく為すことは崇高に為することである。社会の幸福のために行動し、自利のためではいけない。それ故、よく為すというのである。」

愛の行為はキリスト教では社会への奉仕へと深く結びついている。

キリスト教精神にもとづいて、多年インドで福祉活動に従事した、マザー・テレサ女史は、苦しみ悩んでいるひとに奉仕をすることは、神に仕えることと同じであると言う⁹⁹。マザー・テレサの奉仕観の中では、社会的救済と宗教的行為とが無私の行為として一体となっている。

インド哲学では、義務や美德、あるいは正義や秩序をあらわす語としてダルマ（dharma）の語が用いられる。ダルマは仏教では「法」と訳された。もとの語根（dhṛ）は「たもつ」という意味で、男性名詞のダルマは「ひとをひととしてたもつもの」「ひととしてたもつべきもの」という意味に仏教では捉えている。ダルマは、今日のヒンディー語ではダルムと発音されるが、ダルムは「宗教（religion）」を意味する語としても用いられている。ヒンドゥー教は Hindu-dharma, 仏教は Bauddha-dharma, キリスト教は Khrist-dharma, イスラーム教は Yavana-dharma という。世界のどの宗教も、ひととしてたもつべきものを説いているという点では同じであるという理解が、南アジアの人々の宗教観にあるからである。

業による応報と輪廻（saṃsāra）の思想は、仏教・ジャイナ教を含めたインドの代表的な宗教や哲学を特色づけるものであるが、インド哲学の内、サーンキヤ学派は、神々の世界へおもむくための「功德」をダルマ（dhama）の語で表す¹⁰⁰。ダルマに否定の a- を付したアダルマ（adharma）は「罪過」の意味となり、アダルマは、獣などの生存領域におもむくとする。他者のためをはかり、他者を思いやることを、ひととしての「義務」と捉えれば、ダルマも福祉の精神と深く結びつくものである。

福祉を「他者をおもいやること」「他者の為をはかること」という意味で捉えれば、その精神や行為を表すことばは他にも数多く挙げられよう。それらも同様に福祉の同義語とみなされるのである。

〔2〕 ひとのためをはかるもの—福祉と真実—

インド政府の公文書には、国章とされているアショーク王の石柱法勅の獅子の頭部の下に、デーヴァ・ナーガリー文字で *satyam eva jayate* と記されている。サティヤ (*satya*) は「真実」の意で、それは「真実のみが制する」という意味となる。このことばは、ウパニシャッドの哲学以来、インド人の精神を貫いてきた²⁰⁾。古来よりインドでは、真実は不可侵であり、真実のことば (*satya-vacana*) には神秘的な力があると考えられていた。

仏教的な「真実」は、覆いを除くことによって示されると考える西洋的な真実とは異なる。たとえ真実であっても、相手のためにならなければ語らないことがあるとするのが仏教の真実観である。これは仏教と同時代のジャイナ教でも同様である。ジャイナ教では、身体の不自由なひとにむかって、そのことを指摘することは真実を語ったことにならないという²¹⁾。真実は、他者のためをはかるものであると考えられていたのである。今日の医学界における難病の告知という問題も、この点から考える必要があるのではなかろうか。

他者のためには秘される真実も、自らにたいしてはそれを明かすことを臆してならない。そのことを、ウパニシャッド文献では、サティヤ・カーマ (*Satya-kāma*) という青年の物語に伝えている²²⁾。彼は、入門に際して、自らの出生を隠すことなくバラモン (*brāhmaṇa*) の師に告げた。バラモンとしての修行をおこなえ得るのは、限られた階級のものだけであった。恥ずべき出生も隠さずに告げた青年に、師は、彼こそが真のバラモンであるとして、入門を許したという。ここで言う「真のバラモン」は、真の人間・真の宗教家ともいべきものである。ゴータマ・ブッタ (釈迦) も、「(真の) バラモンたるの道を明かす」ことを、その教えの基本としている²³⁾。ここでいうバラモンも、ヴェーダの宗教 (*Brahmanism*) にもとづくバラモン階級の人々を指しているのではない。

真実のことば (*satya-vacana*) は、インドの文学作品や大乘仏教においても、重要な意味を有している。サティヤは、漢訳仏典には「真実・至誠」「誠・諦」等と訳された。神道の重要な概念とされる「まこと (真事)」ということばは幾つかの漢字にあてられるが、「誠」も「諦」も「まこと」と訓じられる。その内、「誠」は「うそのないこころ・ごまかしのない言行」をいい、「諦」は「真相をあきらかにする」ことをいう。

宗教も福祉も、ひとのためをはかり、「まこと」がなければならぬ。真実もまことも、宗教的に言えば、愛 (*agape*) や慈悲の精神に裏付けられるものである。ひとのためをはかる、その「ひと」は、宗教においては宗教共同体や民族といった枠を越えるところに世界宗教・普遍宗教への道がある。福祉においては、「特定の社会ないし国民全体の幸福」という社会福祉から、人類・環境世界全体へと展開するところに世界福祉・普遍福祉への道がある。そのためにはこれまでのさまざまなイデオロギーが、人類やわれわれを取り巻く環境世界にどのような影響を与えてきたのかを正しく批評する必要があるであろう。

まとめ

福祉マインド・福祉のころ、こうしたことばを最近はたびたび耳にするようになった。今後の福祉型社会に向かって、制度や行政面だけでまかないえない現状があるからであろう。確かに、福祉のころというようなソフトな表現や精神論では、積極的で具体的な社会改革に結びつかなかった時代があった。社会福祉関係の先学の方々の、恐らくそれは大方の思いでもあろう。しかし、精神やころをソフトであるとするならば、これまではハードの部分に傾きすぎてはいなかっただろうか。我々は、今ころの時代の到来をあらためて考えさせられるのである。

福祉は、「他者を思いやる」ころに支えられる。ひとのためをはかる純粋なころは、無私無欲であり、そうしたころは宗教によって支えられてきた。その宗教は、初めに述べた意味の宗教であり、根本のことわりとしての宗教である。クロポトキン（Kropotkin, 1842—1921）は、動物の世界にも相互扶助が行われているとした。彼は、人間の道徳的感情を必然的に支えるのは自然の力であり、それはいかなる宗教や立法者の命令よりも強いという²⁹。自然のなかにおける相互扶助は、種が生き残るためにも必要なことである。しかし、人間社会における相互扶助は、世界や環境全体の福祉を目指すことができる。

福祉ということばの有する意味を吟味してゆくと、宗教と密接なつながりをもっていることがわかる。その福祉は近代社会におけるこれまでの獲得すべき福祉から、われわれが相互に平等の人間として「他者を思いやる福祉」へと展開してゆくところに、これからの福祉の目指す道標があろう。この意味での福祉は、すでに宗教的行為としても、あるいは社会の慣習として伝えられてきたものの中にも見出せた。人間が贖いえないものを必然であると考えるところに、西洋の運命論や仏教の「応報思想」があった。しかし、そうした運命も、人類の「利他愛」によって変えられえと、キリスト教思想家P・A・ソローキン教授は力説する³⁰。「利他愛」は仏教の「慈悲」の精神とも同様である。

ころや精神の向上によって社会の福祉はよりよいものとなる。古代のインド人たちは、人間が他の動物と異なる所以を、「（正しく）考える・（正しく）信ずる・（正しく）尊敬する」ことが出来るからであると考えた。ひと（manusya）を表すサンスクリット語の語根 man には、そうした意味があるのである。二十一世紀には、福祉が、地域社会から更には国家を越えて世界の福祉へと目が向けられることであろう。福祉の精神なくしては、世界の抗争・対立は無くならない。この場合の「福祉」は、根本のことわり・ひとためをはかるという意味の「宗教」に置き換えることができよう。

福祉の精神は、真の宗教の目指すところであり、仏教の根本精神でもある。7～8世紀の大乗の学僧シャーンティ・デーヴァは「他者と自己と〔の立場〕を置き換えてみる(parātma-parivartana)」³¹ことこそが、仏教の最高の教えであるとした。先進諸国では、すでに歳出抑制

のために、既得の権益にも行革のメスを入れる方向に動いているということが報道されている。やがてわが国の福祉政策も、そうした方向を取らざるをえないかもしれない。社会において保障される福祉を支えるのは、我々の義務である。行革によって保障が見直されたとしても、福祉を支えるという義務感が、「利他愛」や「慈悲」のところに裏付けられれば、制度・行政でまかないえない今後の社会福祉を支えることができると考えるのである。

〔注〕

- (1) 「宗教」ということばの意味については、中村 元博士の論文が『学士院紀要』第46巻第2号〔平成4年2月〕に「宗教という訳語」として寄せられている。もともと仏教語に由来することばは、根本のことわりとしての「宗」と手段としての「教」とに分けられる。仏教では「教」を手段〔方便〕と捉えた。手段を絶対視することなく、「教」はその時代に相応しいものとならなければならないとする。
- (2) 吉田久一教授は、日本の福祉思想が社会的認識というより、実践の中で育成された点を指摘している。それが「社会的歴史的」実践とは隔たりがあったとしても、欧米型の社会福祉を導入し定着させる際の土壌を提供してきたことを特徴として挙げている。『日本社会福祉思想史』〔吉田久一著作集(1)・川島書店、1989年9月〕序章参照。
- (3) 主要な研究書として矢島浩・現立正大学教授の『明治期キリスト教社会事業施設史研究』〔雄山閣、1982年〕がある。他に概説的なものとしては村田保夫「キリスト教の社会福祉事業」〔『日本「キリスト教」総覧』〔別冊歴史読本・事典シリーズ26、新人物往来社、1995年12月〕〕があり、関連資料を注記している。
- (4) 「私たちは、現実の状況や出来事を説明するよりも、むしろイデオロギー的立場に基づいたモデルを構成する立場を乗り越え、用語のうえでは単純に記述されているかのようにみえるが、しかし実際には高度の価値付加がなされているようなモデルの構成に進んでいかなければならない。」R・ピンカー『社会福祉の三つのモデル (The Idea of Welfare)』第1章 利己主義と利他主義〔黎明書房、昭和56年2月〕20頁。
- (5) 本稿を作成するにあたり、村田松男・前立正大学短期大学部教授からは氏の講義ノートの披見ほか懇切なご教示を受けた。戦後の福祉事業につながる当時の世相については村田松男『老残革命よもやまばなし』〔創栄出版、平成7年1月〕、長尾章象（前立正大学短期大学部教授）「占領下の社会情勢」〔『厚生省二十年史』昭和35年〕に詳しい。
- (6) 諸橋徹次『大漢和辞典』（大修館書店）巻八には、「福祉歸_二乎王公_一」〔韓詩外伝、三〕、「賜_二我福祉_一」〔壽算無_二極_一〕〔易林、大有〕を挙げる。『日本国語大辞典』（小学館、昭和51年9月）には、福祉を「みちたりた生活環境・さいわい」等とし『易林』ほか、『西国立志編』「人生の福祉を増し有用の事業を成ずには」を典故として挙げている。
- (7) Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged, G. & C. Merriam Company, Springfield, Massachusetts, U. S. A. p. 824参照。
- (8) 須郷登世治『ドイツ憲法の解説 Grundgesetz und Verfassung für Deutschland』〔中央大学出版会・1991年9月〕第2編「ドイツ民主共和国（東ドイツ）憲法」・第3編「ドイツ連邦共和国（西ドイツ）基本法」参照。
- (9) ブータンはヒマヤラ東部の人口60数万の小さな王国。ワンチュク国王が昭和天皇の大喪に「ゴ」と呼ばれる民族衣装で参列したことで知られる。「国家にとって大切なことはGNP（国民総生産）ではなく、GNH（国民総幸福）である。」と言う。読売新聞「編集手帳」〔平成8年10月5日付け〕には、こうしたことや、この王国と島根県三隅町との国際協力が始まって10年になることが紹介されている。

- (10) 藤堂明保編『漢和大辞典』〔学習研究社・第26刷1989年〕には、「福」は「神から恵まれた豊かさ。転じて、しあわせ。」とする。藤堂氏の辞典による「解字」を参照。
- (11) アショーカ王の政策は「法 (dhamma, dharma)」による統治を目指した。王は「すべての人(sava-munise)はわたくしの(me) 子供 (pajā) である。」〔Jaugad Sep. EDICT I; Dhauli Sep. EDICT I. ref: ASOKA TEXT AND GLOSSARY by A. C. Woolner, first published 1924, first reprinted 1982, pp. 21-23.〕とした。動物の去勢や無益の殺生を禁じ、当時の諸宗教を保護するのみならず、植樹、井泉の掘削、休憩所の設営、人々や家畜のために水のみ場などを設置している。すべての人の hita-sukha (welfare and happiness) を願ったことが、諸種の碑文に刻まれている。
- (12) The Vinaya Pitakam, ed. by H. Oldenberg, vol. 1. The Mahāvagga, London, Reprint, 1969. 拙論「仏伝(梵天観請)の大乗の展開」〔『知の邂逅——仏教と科学』佼成出版、平成5年3月〕567～582頁参照。
- (13) 『法華経』第10章「法師品 (Dharmabhāṣaka-parivarta)」にはボサツたちが世間 (loka) の「福祉 (hita)」と「慈しむもの (anukampaka)」としての誓願 (praṇidhāna) の故に、この世界へ生まれたとする。大乘仏教の「願生」の思想が、この章には明確に位置づけられている。衆生たち (sat-tvānām) の「福祉のために (hitārtha)」ということが原始仏教以来一貫した思想である。大乘經典の『法華経』はその思想とボサツの実践を結びつけた。 Saddharmapuṇḍarīka-sūtra, romanized and revised text by Wogihara and Tsuchida, Tokyo 1958, pp. 197, 1. 22-198, 1. 3.
- (14) 『法華経』「安樂行品 (Sukhavihāra-parivarta)」には、仏滅後のボサツは安樂な境地に住して (sukha-ssthita) 法を説くべきことを述べている。 op. cit, p. 241. 11. 7-20.
- (15) Encyclopaedia of Religion and Ethics. ed. by J. Hastings, New York 1910.
- (16) 聖徳太子の四箇院建立の縁起は次のように伝えられている。「また四箇院を建立する意趣、何を以てか識らんや。施薬院は、これ一切の芝草・薬物の類を殖え、方に順じて合薬して、各々楽うところに随いて、普くもって施し与えよ。療病院は、これ一切の男女無縁の病者を寄宿せしめ、日々に養育して、師長は父母のごとくせよ。病比丘におきては、相い順いて療治すべし。禁物の蒜肉は願樂するところに任せて、服して差愈しめよ。ただし日の期を限って三宝に祈り乞え。無病に至らば、戒律に違ふことなく努力めよ。悲田院は、これ貧窮・孤独・単己無頼を寄住せしめ、日々に眷顧して、飢渴をいたせしむるなかれ。もし勇壯・強力を得ん時は、四箇院の雑事に役仕せしむるべし。その養料物は摂津の国、河内の国、国毎に官稻各々三千束。これをもって供用せんのみ。三箇院は国家の大なる基、教法の最要なり。敬田院は、一切衆生の帰依渴仰する、断悪修善、速證無上大菩提の處なり。」〔吉田英哲・奥田清明監修『書き下し『聖徳太子伝暦』世界聖典刊行会協会・平成7年11月、48—49頁〕。
- (17) 中村 元『慈悲』〔サーラ叢書1、平楽寺書店、1964年〕参照。
- (18) 拙論『『ボーディテャルヤヴァターラ』と『イミタチオネ・クリスティ』——東西の宗教書にみられる共通点』〔『大倉山文化会議研究年報』第1号、1989年、53—70頁〕に、原文と邦訳を載せて幾つかの共通点を挙げてみた。
- (19) 「私の願いは神さまを愛し お仕えすること あなたの 苦しむ子ども一人ひとりの中におられる神さま あなたにお仕えすることです」〔『マザーテレサ 愛は傷つく (A Living Love Hurts)』ドン・ボスコ社 (新宿四谷)。本書にはダンパウロスによる美しい切り絵とともにマザーテレサのことが詩情ゆたかに邦訳されている。
 オースライズド・バイオグラフィーが1996年に出版されている。 Mother Teresa, The Authorized Biography, Navin Chawla, published in the USA in 1996 by Element Books, Inc.
- (20) 『ヨーガとサーンキヤの思想』〔中村 元選集決定版・第24巻、春秋社、1996年9月〕464頁参照。
- (21) 『マーンドウーキヤ・ウパニシャッド (Māṇḍūkyaopaniṣad)』Ⅲ, 1, 6にこの文句が登場する。『ウパニシャッドの思想』〔中村 元選集決定版・第9巻、春秋社、1990年7月〕第11章 (713—722頁) には「真実」に関して詳しく述べられている。

インドの故J・ネール首相は、この文句を好んで人に書いて与えた。東方学院〔東京・神田〕の理事長室にはその書がかけられている。

- (22) 『思想の自由とジャイナ教』〔中村 元選集決定版・第10巻, 春秋社, 1991年3月〕292頁参照。
- (23) Satyakāma の物語は『チャンドーギヤ・ウパニシャッド (Chāndogya upaniṣad)』4, 4に登場する。『ウパニシャッドの思想』〔前掲書〕160—168頁参照。
- (24) Suttanipāta 第3章9節ほか, Dhammapada 第26章には, 真のバラモンとは何かが説かれている。『ブッタのことば (スッタニパータ)』『真理のことば (ダンマパダ)』〔中村 元訳・岩波文庫〕当該箇所参照。
- (25) P・A・ソローキン『利他愛——善き隣人と聖者の研究——』〔広池学園事業部, 昭和52年〕参照。
- (26) 「人間の道徳的感情は, 最初の類人的動物がこの地上に出現するずっと以前に, 動物社会のうちに発達した相互扶助本能の一層の進化にすぎない。』『世界の名著』『アナーキズムの起源』中央公論社, 昭和46年2月〕462頁参照。クロボトキンには「相互扶助」を論じたものがある。cf. Mutual Aid, a Factor of Evolution (1902)
「ディユルケームやクロボトキンは, 非公式的でかつ自発的な相互扶助の実践に信頼をおき, その実践のなかに, 利他的であろうとする人間的性向の必然的かつ自覚的な証明があると見なすのである。」R・ピンカー『前掲書』25頁。
- (27) シャーンティ・デーヴァは「自他の転換 (parātmaparivartana)」を「最高の秘奥 (paramaṁ guhyam)」であるとしている。Bodhicaryāvatara (Bibliotheca Indica) edited by V. Bhattacharya. The Asiatic Society Calcutta 1960, VIII-102.